

「辞書を作ろうと、思います」

雫がそう言った時、研究室にいたのは彼女の夫であるエリクと、雇い主であるファルサス国王だ。

ファルサス城の研究室にて、エリクは自分の研究をしており、そこに雫は弁当を持って昼休みに来ていた。王については何故かいる。理由は分からない。この主君の行動にいちいち理由を求めても仕方がない。

エリクが書いていた論文から顔を上げる。

「辞書？ 去年できたばかりじゃ？」

「あれは大辞書の類なので……」

雫が異世界に迷いこみ、なんだかんだで五年。こちらの世界で生きていくことに決めた彼女は現在、幼児期の言語学習を専門とした学者として、ファルサス城に仕官している。それをしながら色々興味を持っている事柄も手をつけているのだが、去年まで作っていた大辞書もそのうちの一つだ。この世界の言語を一から学んだ雫が、多方面の協力を取り付けて大陸共通言語のあらゆる単語を集めて何人かで辞書を編纂した。

それは全五巻、部数百冊の希少本で、ファルサス城をはじめ大陸内の要所に所蔵されているのだが……今回作りたいのはそれではない。

「二人とも、私の元の世界の辞書見えますよね」

「あの箱みたいなのやっただろ？」

「はい。これから先、生得的に言語を持たない子供が成長していくと、自学の重要性が高まると思います。その時、一人一冊とまでは行かなくても、気軽に手に取れる

辞書があったらいいと思うんですよ」

「その意図だと安価に、大量に、って感じかな」

エリクの確認は打てば響く類のものだ。雫は王の前に人參クッキーの皿を押しやりながら頷く。

「そうですね。あとは大きさも一冊で子供が開きやすい感じにしたいです。収録単語を絞って、習熟度別に中身を変えたものを何冊か、という感じでしょうか」

大辞書は、今後数百年を見据えて作ったものだ。大陸共通言語というものがこれからどう変わっていくのか。変わってしまった後の時代から振り返れるものがあつた方がいい。だから劣化防止の魔法もかけてもらって、時代を越えられるものにしてもらった。

けれど、次に作りたいのは日常使いの辞書だ。

王はクッキー皿の中から、人參が入っていないものより分けてかじる。

「好きにしろ。企画概要の書面を出しておけ」

「王様のその新しいことを気軽にやらせてくれるところ、上司としては最高なんですよね……性格だけが難があるというか」

「性格はお前もいい勝負だからな。——で、何の問題があるんだ？ 言ってみろ」

上司の言葉に雫は目を瞠る。ラルスは、わざわざ自分がいる席で雫が言い出したことには、別の意味があると気づいているのだろう。勘が良くて助かる。ちょうど正式な場で王に確認するほどでもない、雑談くらいの問題があるのだ。

「問題は、紙なんです。この世界の紙って割と厚いじゃないですか。辞書を作るとなると、どうしても分厚く重くなってしまうというか……」

「君の世界の紙が薄いんだと思うよ。あれすごいよね。どうやって作ってるの？」

「ハハハ、知りません」

異世界に来るまで一般文系学生だった雫は、辞書に使われている薄い紙の製法を当然ながら知らない。

「でも私の世界の技術を追究する必要はないと思うんですよ。何かこれに解決策とかあつたりしませんか？」

それが知りたくて、この二人がいる場で口にしたのだ。エリクは少し考えて、口を開く。

「物質の重さを軽減する魔法がある」

「そう来ましたか」

「紙一枚一枚にかけるのは現実的じゃないけど、本一冊にならなければいいかもしれない。ただし、費用が高む」

「あああー。それは苦しい！」

「——大陸北部に、薄い紙を作る街がある」

クッキーをかじりながら、王は平然と言う。性格以外は欠点のない彼は、端正な顔に頬杖をついた。

「民芸品としてだけだな。向こう側が透けるくらいの薄い紙だ。その地方で栽培してる草から繊維を取って作ってるらしい」

「え！ 見てみたいです！ 印刷に使えるかな！」

「見に行ってみたいなら紹介状書いてやる」

「あ、じゃあ今書いてください。明日行きます」

「分かった。この紙一枚くれ」

言いながら王は、エリクが論文用に用意していた紙を取ると、雫から受け取ったペンで紹介状を書いていく。

エリクはそんな身軽すぎる主君と妻を呆れて見やうとして「僕も行くよ」とだけ言ったのだった。